

そう言って大金を寄付した。

やがて、宿場の人々によって金比羅さまはりっぱなお堂にまつられた。

それからというもの、内津峠をこえる多くの旅人が、金比羅さまのおかげで山賊の手から救われたということである。

岡庭芳彦

わきの島の狐



わきの島の狐

昔、わきの島に水野利衛門さまという長者があつてな。それはそれは大きな屋敷に住んでござつたそうな。

その利衛門さまのうちは、昔からずうつと、よろず屋をやつてござつた。よろず屋というのは、砂糖だの、お菓子だの、塩だの、それに簞だの、糸だのといろいろ売つとる店のことや。

利衛門さまが、親の義左さから商売を継いでからや。どんだん金がたまるようになってな。それ、あつちの田んぼ、それ、こつちの山といったぐあいに、田んぼや山をどんだん買った。そしてとうとう、わきの島一の長者になつてしまつた。

どうしてそんなにもうかつたか、村の衆は不思議がつて首をひねつてみたが、かいかくわからなんだそうや。

ところがある晩、組の衆で多度さまの夜桜を見ようということになつた。多度さまの桜は見事に咲いてな、山は桜で埋まつていた。組の衆は、酒にもよつたが、桜の見事さにもよつて上きげんやつた。利衛門さまもつい、浮き浮きした気分になつて、今までじつと心の奥にしまつておいた秘密の話を、みんなに話してしまつた。それはな、こういう話や。

利衛門さまの店へ客が砂糖を買いにくると、利衛門さまが砂糖をはかりにのせて目方をはかる。

その時、目には見えん狐が店におつてな、その狐がひよいとはかりにのるんや。それではかりはびいんとはねて、狐の目方だけ砂糖が少なくてすむ。お客はそんなことは知らずに買つていくんやな。それが、砂糖ばかりではない。せんべいにしても、餡にしても、塩にしてもみんなはかりではかつて売るんやから、そりやあもうかるわ、もうかるわ。どんだん金がたまって笑いがとまらんわいと、利衛門さまは、さも得意そうに話した。でも、組の衆は誰ひとり本気にしなんだ。どうしてかという、酒によつていつたことを本気にするとばかをみる。こりや、長者の作り話やとみんなは思つた。

それから一年もたたんうちやつた。どうしたわけか、利衛門さまの店は、今までのように金がたまらんようになつた。その上、わけのわからん病氣になつて、寝たり起きたりのくらし。ひとり息子の新衛門さまは、お坊ちゃまでな、働くことをまったく知らん、お金を使うことしか知らんという人でな、いつも町へ出かけていつて遊んでくるというくらしや。そんなようすに、男衆や女衆は、あらそつて自分のわけまえをもらうと、みんな里へかえつてしまつた。そうなると、あつちの酒屋から、こつちの料理屋からというあんばいに、借金のとりに押しかけた。今までやしきから見おろしていた田んぼも、見上げていた美しいヒノキの山も、みんな借金のかたに取りられてしまつた。

そんなことがあつて、よけい気を落とした利衛門さまは、とうとう死なつせる。いくらもた

んうちに、ごしんぞうさまも、後を追うように死なさせる。新衛門さまはたったひとりになってしまった。なんでも、家も店も借金のかたにとられてしまったとかで、利衛門さまが築かれたしんしょは何もかものうなってしまうた。

そこで村の衆は、いつとはなしに、狐がはかりの上にとりかかるといふ話は本当やったんや。そして、その話をみんなに聞かせたばかりに、もうかる狐はよそへいってしまつたんやと、うわさするようになった。

太田君代

武兵衛さんのイノシシ退治

